

水月亭について

伊奈波神社教学研究員 笥 真理子

伊奈波神社境内、社務所の西に茶室「水月亭」が建っています。岐阜東別院（大谷派岐阜別院）から移築再建されて茶席披きが行われたのは平成十五年九月で、御記憶の方も多いでしょう。

水月亭は、もともとは京都の東本願寺に裏千家十一代玄々斎の好みにしたがって建てられていたものでした。玄々斎は三河国奥藩主松平乗友の子として生まれ、裏千家に婿養子として入った人です。東本願寺と裏千家とのつながりは、嘉永三年（一八五〇）ころに第二十代法主の達如上人が玄々斎に入門したことに始まります。文久元年（一八六一）には達如上人の子で東本願寺第二十一代法主となった嚴如上人も玄々斎に入門し、二月に東本願寺別邸である枳殻邸で玄々斎が献茶をしました。

金沢の真野宗古に宛てた酉七月

二十八日の日付のある書状で玄々斎は、嚴如上人が入門したこと、毎月五と十の日に稽古のため参殿するようになったことを告げています。この酉年は文久元年を意味します。東本願寺で毎月数度のお稽古をするために茶室が建てられたのは、それからさほど年月が経たない江戸時代最後のころと思われる。のち、大正十二年（一九二二）に武田五一の設計により内待所が和風から洋風に改築され、茶室を含む古い建物は解体保存されました。

この茶室の行方を探して、岐阜東別院にたどり着いたのが井口海仙さんでした。井口さんは裏千家十三代の三男で、『茶道月報』を主宰し、淡交社社長として活躍された茶人です。東本願寺に玄々斎好みの茶室について問い合わせた井口さんは、本山から岐阜東別院に移した茶室があることを聞

いて岐阜を訪れ、茶室と書院を御覧になって、柄杓の柄の窓など玄々斎好みの特徴を確認なさいました。柄杓の柄の窓は、先端が二股の柄と凸形の柄の二種類を組みあわせて藤ツルでからげてあり、意匠としても面白いものです（写真1）。この調査結果は昭和二十六年十二月号の『茶道月報』に「岐阜別院の茶室」として掲載されました。これがきっかけとなって、裏千家淡交会により保存会が結成され、裏千家十四代淡々斎が「水月亭」と命名し、昭和三十一年七月に披露茶会が開催されました。しかし、平成十二年に東別院内の幼稚園舎建設にあたり取り壊されることとなり、淡交会岐阜支部が譲り受けて解体保存し、伊奈波神社に再築して平成十五年の茶室披きとなったものです。

それでは、京都から岐阜にこの茶室が移ったのはいつだったのでしょうか。岐阜東別院は明治二十四年（一八九一）の濃尾震災でほとんど焼失し、仮本堂が建てられました。本堂は明治四十二年十一月に起工式が行われましたが、その建築中に仮本堂と

大正十四年に岐阜東別院が発行した『宗祖大師六百五十年大御遠忌記念帖』に、この本堂とともに茶室などの写真が掲載されています（写真2）。

このときの茶室名は「水吟亭」と

（写真2）岐阜市歴史博物館所蔵

水吟亭の庭園



御殿書院の間



なっており、それに付属する御殿書院の間は現在の水月亭の書院と同じ造りであったことがわかります。残念ながら水吟亭内部の写真はありませんが、井口さんの「岐阜別院の茶室」に

図面があり、ようすを知ることができず。現在の水月亭と比べると、点前畳向こうの柵の形（もとは三角形、今は台形）や畳の敷き方が変わっています。東別院から現地へ移すときは状況を変えなかったと伺っていますので、この変更はあるいは井口さんによる「発見」後に茶室を活用しようとしたときになされたものかもしれません。また、書院の間の名は昭和六十二年発行の『岐阜県百寺』で

「暫眠室」となっています。井口さんが実見したときに、ここは法主の居間で常は「開けずの間」であると述べられており、暫眠室の名は休息の場として似つかわしいといえるでしょう。

以上を考え合わせると、京都から岐阜への移動は大正十二年から同十四年の間といえます。

また、茶室の移転は岡山松竹梅の襖絵と交換であったと伝えます。現在、東本願寺桜下亭には「辛亥仲春」の年紀がある松竹梅の豪華な襖絵があり、「桜下亭障壁画」として京都市指定文化財になっています。辛亥は寛政三年（一七九二）で、応挙は五十九歳、晩年の円熟期の作品です。もともとは岐阜市内の富商から東別院に寄進されたもので、濃尾震災のときかろうじて取り出して保管されていました。『白蛾ひとり語り』には、絵の代金を見積もった応挙の書状が紹介されています。その箱書には「御坊下図幅」とあり、御坊つまり東別院に寄進した襖絵に関わるものと考えられます。見積もられた内容も松竹梅で、桜下亭に現存する画題の通りです。桜下亭は、

鐘楼が大正元年九月の暴風雨で倒壊してしまいます。しかし本堂の建設は続けられ、大正二年五月には七分通り完成、同六月には内部の造作と彫刻物取り付けに取り掛かりました。そして大正五年二月に竣功、同四月に入仏式が挙行されました。この建築は本山の東本願寺から指名囑託された伊藤平左衛門が担当しました。伊藤平左衛門は代々続く名古屋の工匠の棟梁で、日本の古建築を研究するとともに愛知県庁舎など洋風建築も手がけています。東本願寺の御影堂建築も担当し、帝室技芸員にも任じられていました。



（写真1）

昭和十四年に東京にあった隠居所を京都に移築したもので、このときに画題にあわせて、松之間・竹之間・梅之間が造られました。

東別院に茶室などが移されたのが大正十二〜十四年。桜下亭の障壁画として応挙の作品が再び世に出るのが昭和十四年。この間に十五年ほどの時間差があります。最終的には東本願寺と岐阜東別院の間で、茶室・書院と襖絵の交換が行われているわけですが、当初から襖絵を受け取るのが前提で茶室などが移されたのかどうか、また襖絵が岐阜から京都へ運ばれたのはいつなのか。調べてみましたが、これを明らかにすることはまだできていません。

現在の水月亭内部の天井部や柱などには痛んだ部分に継ぎ木をしたところが随所に見え、創建から百四十年ほど経た建物を移築する苦心を感じることが出来ます。なお、本稿を執筆するにあたっては、橋詰幹事長を初めとする淡交会岐阜支部の皆さんに御教示をいただきました。厚くお礼申し上げます。